

「或（あるひと）云（いわく）、比叡の御社に、いつはりてかんなぎのまねしたるなま女房の、十禅師（じゅうぜんじ）の御前にて、夜うち深け、人しづまりて後、ていとうていとうと、つづみをうちて、心すましたる声にて、とてもかくても候、なうなうとうたひけり。其（その）心を人にひ問はれて云（いわく）、生死無常の有様を思ふに、此（この）世のことはとてもかくても候。なう後世（ごせ）をたすけ給へと申すなり。云々（うんぬん）」

これは、まず「一言芳談抄（いちげんほうだんしょう）」のなかにある文で、読んだ時、いい文章だと心に残ったのであるが、先日、比叡山に行き、山王権現（さんのうごんげん）の辺りの青葉やら石垣やらを眺めて、ぼんやりとうろついていると、突然、この短文が、当時の絵巻物の残欠（ざんけつ）でも見る様な風に心に浮び、文の節々が、まるで古びた絵の細頸（さいけい）な描線を辿（たど）る様に心に滲（し）みわたった。そんな経験は、はじめてなので、ひどく心が動き、坂本で蕎麦（そば）を喰っている間も、あやしい思いがしつづけた。あの時、自分は何を感じ、何を考えていたのだろうか、今になってそれがしきりに気にかかる。無論（むろん）、取るに足らぬある幻覚が起ったに過ぎまい。そう考えて済ますのは便利であるが、どうもそういう便利な考えを信用する気になれないのは、どうしたものだろうか。実は、何を書くのか判然しないままに書き始めているのである。

「一言芳談抄」は、恐らく兼好の愛読書の一つだったのであるが、この文を「徒然草」のうちに置いても少しも遜色（そんしょく）はない。今はもう同じ文を眼の前にして、そんな詰らぬ事しか考えられないのである。依然（いぜん）として一種の名文とは思われるが、あれほど自分を動かした美しさは何処に消えて了（しま）ったのか。消えたのではなく現に眼の前にあるのかも知れぬ。それを掴（つか）むに適したこちらの心身の或る状態だけが消え去って、取戻す術（すべ）を自分は知らないのかも知れない。こんな子供らしい疑問が、既に僕を途方もない迷路に押しやる。僕は押されるままに、別段反抗はしない。そういう美学の萌芽とも呼ぶべき状態に、少しも疑わしい性質を見付け出す事が出来ないからである。だが、僕は決して美学には行き着かない。

確かに空想なぞしてはいなかった。青葉が太陽に光るのやら、石垣の苔（こけ）のつき具合やらを一心に見ていたのだし、鮮やかに浮び上った文章をはっきり辿った。余計な事は何一つ考えなかったのである。どの様な自然の諸条件に、僕の花の精神のどの様な性質が順応したのだろうか。そんな事はわからない。わからぬ許（ばか）りではなく、そういう具合な考え方が既に一片の洒落（しゃれ）に過ぎないかも知れない。僕は、ただある充ち足りた時間があつた事を思い出しているだけだ。自分が生きている証拠だけが充満し、その一つ一つがはっきりとわかっている様な時間が。無論、今はうまく思い出しているわけではないのだが、あの時は、実に巧みに思い出していたのではなかったか。何を。鎌倉時代をか。そうかも知れぬ。そんな気もする。

歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいう思想からはっきりと逃れるのが、以前には大変難かしく思えたものだ。そういう思想は、一見魅力ある様々な手管（てくだ）めいた

ものを備えて、僕を襲ったから。一方歴史というものは、見れば見るほど動かし難い形と映って来るばかりであった。新しい解釈なぞでびくともするものではない、そんなものにしてやられる様な脆弱（ぜいじゃく）なものではない、そういう事をいよいよ合点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。晩年の鷗外が考証家に墮したという様な説は取るに足らぬ。あの膨大（ぼうだい）な考証を始めるに至って、彼は恐らくやっとう歴史の魂に推参（すいさん）したのである。「古事記伝」を読んだ時も、同じ様なものを感じた。解釈を拒絶して動じないものだけが美しい、これが宣長の抱いた一番強い思想だ。解釈だらけの現代には一番秘められた思想だ。そんな事を或る日考えた。又、或る日、或る考えが突然浮び、偶々（たまたま）傍にいた川端康成さんにこんな風に喋（しゃべ）ったのを思い出す。彼笑って答えなかったが。「生きている人間などというものは、どうも仕方のない代物だな。何を考えているのやら、何を言い出すのやら、仕出来（しでか）すのやら、自分の事にせよ他人事にせよ、解った例（ため）しがあったのか。鑑賞にも観察にも堪えない。其処（そこ）に行くと死んでしまった人間というものは大したものだ。何故（なぜ）、ああはつきりとしっかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしているよ。してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな」

この一種の動物という考えは、かなり僕の気に入ったが、考えの糸は切れたままでいた。歴史には死人だけしか現れて来ない。従って退（の）っ引（び）きならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ。思い出となれば、みんな美しく見えるとよく言うが、その意味をみんなが間違えている。僕等が過去を飾り勝ちなのではない。過去の方で僕等に余計な思いをさせないだけなのである。思い出が、僕等を一種の動物である事から救うのだ。記憶するだけではいけないのだろう。思い出さなくてはいけないのだろう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしているので、心を虚（むな）しくして思い出す事が出来ないからではあるまいか。

上手に思い出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向って飴（あめ）の様に延びた時間という蒼（あお）ざめた思想（僕にはそれは現代に於ける最大の妄想と思われるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方の様に思える。成功の期はあるのだ。この世は無常とは決して仏説という様なものではあるまい。それは幾時如何（いついか）なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状态である。現代人には、鎌倉時代の何処（どこ）かのなま女房ほどにも、無常という事がわかっていない。常なるものを見失ったからである。